

大連、旅順を旅して 歴史的遺産の保存を望む

広島大学マスターズ会員 菅川健二

大連(旅順地区を含む。)は、日本の近代史にとって重要な役割を果たした日露戦争の戦場であり、その後、40年にわたり日本が統治したところである。同時に、私にとっては生まれ、8歳まで育った懐かしい土地でもある。ご当地に広大マスターズの一員として関係者とご一緒に楽しく旅することができたことは、うれしい限りであった。

私としては、その後4度目の訪問であったが、大連を訪問するたびに大きく発展し、緑と海に囲まれた人口6百万の風格のある大都市に変貌していることに、中国の力強い発展ぶりを垣間見ることができる。

毎度のように、かつて日本ゆかりの場所 旅順港、203高地、水師営会見所、大連駅、中山広場を囲む建築群、ヤマトホテル(大連、旅順)等々を訪れるが、日本人しか関心のないところでも、大半はよく整備されており、中国当局に敬意を表したいと思う。ただ、一部では、例えば日本への引き揚げ港でもあった大連港を一望に眺められる大連港務局はすでに撤去され、旅順のヤマトホテルもまもなくその運命にあるやに聞く。また、乃木将軍とロシアのステッセル中将が停戦条約を結んだ水師営会見所が雨漏りしたり、日中をはじめ世界の要人が利用したヤマトホテルが老朽化し、貴重な備品を売却してその保存に努めている姿は胸に痛む。このまま時間が経過するといずれ貴重な歴史的遺産も消滅するのではないかと危惧するものである。今のうちに、保存する方策を有志のみならず、日本政府自身真剣に検討してほしいと思う。